

私にも  
言わせて!  
第70回

公衆衛生医として  
ワークアズライフを実現



山梨県中北保健福祉事務所  
峡北支所長  
岩佐 敏

昭和62年山梨医科大学卒業、平成12年筑波大学大学院博士課程修了。29年4月、神奈川県立保健福祉大学教授を辞して現職。30年4月より山梨県立精神保健福祉センター所長を兼務。博士(医学)、脳神経外科専門医、死体解剖資格認定、病理専門医・指導医、細胞診専門医、労働衛生コンサルタント(保健衛生)、社会医学系専門医・指導医。

山梨県中北保健福祉事務所長兼山梨県立精神保健福祉センター所長の岩佐敏です。山梨医科大学を卒業して31年を経過し、全く若手ではありませんが、自分の医師人生を振り返りつつ、この1年、公衆衛生行政を経験した感想について私見を述べさせていただきます。

公衆衛生医になるまでの経緯

私は、脳神経外科、病理学を経て、公衆衛生行政の場に飛び込みました。つまり、臨床医学、基礎医学、社会医学のすべてを経験したことになると思います。自分の決めた一つの専門分野で医学の道を邁進していくといった生き方が、方がかつこうよかったのですが、意に反してこんなふうになってしまいました。

よく「専門分野は何ですか」と聞かれるのですが、いつも説明するのに苦労しています。その場その場で一生懸命やっていました。医学のいろいろな分野に興味があ

ったこと、過去へのこだわりは全くといってよいほどなかったこと、比較的容易に転科できたのだと思います。これだけふらふらしていると転職ごとに落ちぶれていくのが普通ですが、私の場合は運よく転職のたびにステップアップすることができました。妻があげまんだったのではないかと、感謝しております。

公衆衛生行政に入るきっかけは、ヤフーニュースにたまたま山梨県の保健所長の公募が出ていたためです。山梨大学在職中に山梨に土地と家を購入した後、妻と5人の子供を残し、神奈川の大学に単身赴任していましたので、週末に片

道3時間半往復する生活から離れて、自宅から通勤したいというのが、大きな理由でした。また、公衆衛生は仕事が楽なイメージがありましたので、50代半ばになった私には肉体的にちょうどいいのではないかとも思いました。妻も反対はしませんでしたので、採用試験を受け、幸い受験者が私一人だったこともあり、首尾よく採用されました。退職届けを提出する時に、大学の事務の人に保健所長になるという、「栄転ですね」と言われた授より地位が上だと知り、私の選択は間違っていないかと内心ほくそ笑んでいました。

ところが妻は、近所の人に私がどこに勤めているかを聞かれた時に保健所というのが恥ずかしいと言っているのです。妻は今まで保健所に行ったことがないし、どのような仕事をしているか分からない

その成果としてプロフィールにありますように、さまざまな専門医や国家資格を取得できたことにとっても満足しています。また、国立保健医療科学院や結核研究所の研究などにも仕事の一環として参加することができ、医療人としての成長や医学技術の進歩も感じられる職場です。幸い職場の同僚、部下にも恵まれ、あまりストレスなく仕事ができています。

近年、医師を含めた働き方改革が推進されていますが、公務員は特にワークライフバランスを重視しています。私的生活と仕事を分けて両方を充実させるということです。実際、有給休暇を取ることが推奨されていますし、産休や育児休業の充実で女性にも働きやすい職場となっています。私は、医学という学問が趣味のようなものになっていたので、筑波大学の落合陽一さんが提唱したワークアズライフ(睡眠以外の時間すべてが仕事であり、趣味である)を実現した、充実した日々を過ごしています。

行政での仕事の抱負

研究の場では個人の発想や能力

い、また保健所の医師は医師らしくないと思っているようです。さらに、保健所にいる医師は私一人だと聞いて、少なからず落胆していたようでした。私も医師免許や死体解剖資格の申請のために保健所に行ったことがあっただけで、他にどのような仕事をしているのかよく知らなかったですし、公衆衛生にいる医師は臨床では使えない物にならない輩が仕方なく働いているといったイメージもありましたので、普通の人はそう考えても無理もないとは思っています。

コメディカルの質の向上へ貢献

私は、このような状態に慣れていません。神奈川県立保健福祉大学は、医学部のない医療系大学だったために、よく学生たちに「医師不足なのになんで医学部以外の大学に勤務しているのか」とか、「大学は給料が安いのに生活は大丈夫か」と

になりました。これからも新しい仕事を与えられても臆することなく、今までに培った知識や経験を生かして立ち向かっていこうと思っています。

か、こちらがあまり聞いてほしくないことをズバズバ質問されてきたからです。そのたびに私は、「医療の質を高めるには医師ばかり能力が高ければ良いのではない。チーム医療なのだから、看護師や管理栄養士、理学療法士などのコメディカルの質も高めなければならぬ。それには大学などの卒前教育が特に重要と考えたので、この大学に来た」と答え、学生には変わった人だと思われながらも納得してもらっていました。同大学は8年で退職しましたが、微力ながら当初の目的は達成できたのではないかと自負しています。妻は、医学部の教授夫人になりたかつたらしく、チクチク嫌みを言っていました。我慢してもらいました。

ワークアズライフを実現

さて、現在の仕事についてですが、保健所の仕事を通して、医学というものを全く別の視点から見ることができていると思います。私は医学という人体の神秘を追究する学問にとっても興味があるため、臨床、研究、教育、行政と違った立場から医学に関わることができ

「期待の若手シリーズ 私にも言わせて!」は、  
全国保健所長会ホームページに  
バックナンバーが掲載されています。

全国保健所長会 月刊公衆衛生情報

で検索してください

[http://www.phcd.jp/update/archive\\_02\\_j\\_koushueisei\\_watashi.html](http://www.phcd.jp/update/archive_02_j_koushueisei_watashi.html)